
やわらかな陽 2

ひなた水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やわらかな陽 2

【Nコード】

N9752D

【作者名】

ひなた水

【あらすじ】

離婚して心が少し不安定なフミちゃんと、幼馴染の七生君の小さな心の交流…その2

七生の家の屋根は深い緑色だった。

「あらためて見ると、変な色ね」

彼の家に来る度に私はそう言った。

「悪かったな、お袋の趣味だよ」

七生はコーヒーを入れながら笑った。部屋中に香ばしい香りが漂う。

「うん。でも小さな頃からこの家に来るのに一度も迷った事なかったよ」

この小さな家に、七生はお母さんと二人で住んでいる。もうずっと長いこと。

幼馴染で幼稚園の時から彼を知っているけれど、お父さんの話を一度も聞いたことはない。

七生の、自分より他人を思いやる優しさは、そんな生活に起因しているのかも知れない。

「で、今日は何の用かな？」

コトリとマグカップを私の前に置き、七生はいつもそうするように、私の顔を覗きこんだ。

「えっ用？」

そんな事を聞かれたのは初めてだった。いつだってこの家に来るのに、用のある時なんかない。ただ七生と話がしたいだけだ。

私は俯いた。七生はため息をつく。

「ほらフミちゃん、自分の気持ち話して」

「えっ？」

「ほんの少しつつかれたくらいで、そんな風に落ち込まないの」

七生は笑って私の頭に手を置いた。

「じゃ、今のわざと？」

「まあね」

彼はほんの少し窓を開けた。暖房で部屋の中が暑くなっていたからだ。スウッと入り込んだ冷たい空気が頬を撫でて心地よい。

「…七生と話がしたいから」

「うん」

七生は頷いた。

「フミちゃんってさ、自分の事嫌いでしょ？」

七生は真面目な顔をした。

「どうしてわかるの？」

「そりゃ長い付き合いだからね」

私はまた下を向いた。七生が私の表情を読むみたいにな、ずっと見つめていたからだ。

「私、傷つけたから」

「えっ？」

「別れた夫を、私すごく傷つけた」

「フミちゃん、もう終わった話だろ」

「終わってない。全然終わってないよ」

ほんの少し語気を強めた。

二年前、私は離婚した。その時のことで、私はずっと自分を責め続けている。

「フミちゃん、夫婦の事でどちらかが一方的に悪いなんてことはないんだ」

「…七生は結婚したことないくせに」

七生の顔つきが一瞬曇った。

しまった！またやってしまった。

七生が今まで独りでいるのには、何か理由があるという事を、私は漠然と感じ取っていた。彼は何も言わないけれど、それは触れてはいけない何かなのだと、私はわかっていたはずなのに…

「あっごめんなさい」

「いや、いいんだ。確かに俺は結婚したことないからな」

「私、本当に無神経、そういう所が…」

「駄目じゃないよ」

七生は私の言葉を遮った。

「えっ？」

「今そう言おうとしたろ？そういう所が駄目なんだって。フミちゃんすぐ言うから。駄目とか出来ないとかさ。でもフミちゃんは駄目なんかじゃないよ。少しも駄目なんかじゃないんだ」

何だか涙が出そうになった。七生は同じ年の癖に昔からいつも私の上に行く。私より大人を生きている。

七生は立ち上がって、棚からチョコの箱を取り出して私の前に置いた。

「フミちゃんのさ、一番の問題はね、さっき言った自分を嫌いだって事だよ」

「えっ？」

「自分が嫌いだから、自分を粗末にしている。自分を粗末にしていると、そのうち他人も粗末にしてしまう。」

そうしたらフミちゃんは、更に自分を嫌いになって更に自分を責めるでしょ？

だからもっと…」

いつもの七生の優しい笑顔が目の前にある。

「もっと？」

「もっと自分に優しくしてあげて」

「七生は自分が好きなの？」

「うん」

迷いもなく彼は頷いた。

「自分を好きってどういう事？」

「自分があるがままに受け入れるって事だよ。俺だって悪い所もある。でもいい所もある。両方あって俺だろ？」

私は黙って七生を見つめた。

「何だフミちゃん？その目は。納得できないって顔だな？」

七生はチョコを一つ口に放りこんだ。

「武田鉄矢みたい…金八先生」

私も銀色の紙に包まれたチョコを手に取り剥いた。子供の頃食べたなつかしい甘い味がした。

「おう、俺は教師だから」

彼の職業は高校教師だ。

「なんか、うさん臭い」

七生は少しも怒ることなく、

「いくらでも、うさん臭いこと言ってやるさ」

私は笑った。

「フミちゃんが納得するまで、いくらでも」

ほんの少し風が強くなった。

七生のそんな言葉を聞きたくて、きっと私はここに来続けているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752d/>

やわらかな陽 2

2010年10月17日11時08分発行